

口語自由詩の先駆者 福士幸次郎  
ふくしこうじろう

敗戦後の混乱が尾を引く一九四七年（昭和二十二）年、中学校が義務教育という現行の六三制の画期的な学校制度が実施された。新制度の中、学校は、校舎はもちろん机、椅子も整わないまま、とにかく発足した。

教科書は、文部省がこれに間に合うよう、新しく編集・刊行した。そのうち、中学校二年生用「国語」の昭和二十四年版三分冊の巻頭には、次の詩が掲げられた。

自分は太陽の子である

自分は太陽の子である、

まだ燃えるだけ燃えたことのない太陽の子である。

今口火をつけられている、

そろそろくすぶりがかけている。

ああこの煙りがほのおになる、

自分はまっぴるまのあかるい幻想げんそうにせめられてやまないのだ。

明るい白光びやくこうの原っぱである、

ひかり充みちた都会みやこのまんなかである、

みねにはずかしそうに純白な雪が輝く山脈である。

自分はこの幻想にせめられて

今くすぶりがつつあるのだ、

黒いむせぼったい重い煙を吐はきつつあるのだ。

ああひかりある世界よ、

ひかりある空中よ、

ああひかりある人間よ、

総身目のごとき人よ、

総身ぞうげ彫りのごとき人よ、

りこうで健康で力あふるる人よ。

自分は暗い水ぼったいじめじめした所からうぶ声をあげたけれども、

自分は太陽の子である、

燃えることをあこがれてやまない太陽の子である。

(富士幸次郎著「太陽の子」による)

この詩の作者富士幸次郎は、弘前の人である。一八八九年(明治二十二年)十一月五日、弘前市本町五丁目通称「椽の木」<sup>とち</sup>に、父慶吉、母は

るの四男として生まれた。最初、父によって寿平と名付けられたが、八歳年上の兄民蔵の反対で、幸次郎と改められた。このことをはじめとして、兄民蔵の弟思いは生涯続き、幸次郎は、精神的にも経済的にもはかり知れない影響と援助を、兄から受けることになる。

父慶吉は、元寺町「柁木座」の座付役者で芸名を市川森五郎と名のついていた。幸次郎二歳の時、父は興業に失敗して、一家は青森に移転するが、その後住居は転々として変わった。父の地方巡業（津軽や秋田、北海道など）には、幸次郎もついて回った。幼い時のこうした遍歴が、その後の幸次郎の放浪癖や踏査研究の巡歴の素地になっているのかもしれない。

幸次郎は八歳の時、青森市葺町たばし小学校に入学。十三歳、浦町高等小学校に入学した年に、父慶吉が亡くなる。一家の苦しい生活の中から、幸次郎は、県立第三中学校（現青森高等学校）に入学する。その時兄は軍隊にいたので、生活は母の劇場の衣装手伝いや賃仕事で支えられた。

翌年、兄が山形の連隊に転属になり、母も兄のもとに行った。幸次郎は一人、学校の関係で青森にとどまり、牛乳や新聞の配達をして生活費を補った。

幸次郎にとって十七歳の年は、波瀾はらんの一年だった。中学二年の冬のこと、図画の先生の「露探ろたん」（ロシアのスパイという意）というあだ名を書いて、級友が陰で笑っていることを、幸次郎は卑怯ひきょうだと思い、同じことを黒板に書いて教師が見回りに来ても消さなかった。これが職員会議で問題となり、その動機や事実を毎日教師に問いただされて、幸次郎は学校に行くことがいやになり、寄宿先の小さな部屋で一人暗い

気持で悩み苦しんだ。今日の登校拒否である。ある大吹雪の朝、宿のおばさんには弘前に行くと言って、二円のお金を懐に、幸次郎は青森から汽車に乗った。野辺地で下車して日中は歩きつづけ夜は汽車に乗って仙台についた。旅費が尽きたので、仙台からは徒歩で厳寒の雪の奥羽山脈を横切って、幸次郎はようやく山形郊外の母と兄のいる家にたどりついた。

後年、幸次郎自身この時のことを、自分は「向こう見ずのテンポ（無鉄砲）、思ったことをやり通すジョツパリ」といつている。確かに、幸次郎の生涯は、津軽弁の「テンポとジョツパリ」の一生と言えよう。この事件がそのはじまりである。

その年の八月、幸次郎は親類を頼って上京し、開成中学校二年に編入学する。しかし、生徒たちに「支那人」とあだ名され田舎者と侮られたこと、学校が私立の営利的経営であったことなどから、翌年にはその学校を退学した。

そして、今度は、日露戦争から帰って上京して来た兄の世話で、神田の国民英学会（夜間部）に入学した。ここを一年半で全課程を卒業する。また、九段の暁星<sup>フランス</sup>仏蘭西語専修学校（夜学）に学んで、一年足らずで<sup>かつぶん</sup>仏文も原書で読めるようになる。幸次郎は語学の才能にたけ、言葉に極めて敏感であった。後年の詩作や「日本音数律論」の研究の素地は、こうして作られていった。

文学青年であった兄民蔵の影響で、幸次郎も文学への傾きはあったが、それを決定的にしたのは、秋田雨雀を知ったことである。雨雀は、同じ津軽の黒石出身で、早稲田大学の学生だったが、その時すでに新体詩集「黎明」<sup>れいめい</sup>を出版している文学者であった。幸次郎十八歳、雨雀二

十四歳のときである。

一九〇八年（明治四十二）幸次郎が十九歳の時に、雨雀の紹介で、同郷の佐藤紅緑に「一生の宿縁を拓く」<sup>ひろ</sup> 出会いをする。それは、紅緑の同郷の陸羯南との出会いと連なって、羯南―紅緑―幸次郎の思想的文学的系譜を成立させることになる。（陸羯南・佐藤紅緑については、「弘前人物志」一一七、二〇二ページに掲載されている。）

紅緑は、当時小説や脚本を書くことに忙殺されていたが、青年時代には正岡子規から俳句を学び、俳人としても知られていた。紅緑の家に寄宿した幸次郎も、はじめは黄雨と号して俳句を作っている。

夏の日、幸次郎が紅緑の長男八郎少年とキャッチボールをしていた。八郎の投げたボールがそれて、たまたまそこを通っていた人見東明<sup>ひとみとうめい</sup>にあたったことから、幸次郎は東明を知ることになる。

八郎は一時期幸次郎と生活を共にするなど幸次郎の指導を受けて、詩人サトウ・ハチローとして出発する。後に、童謡・歌謡の作詞家として多くの人々に親しまれた。

一九〇九年（明治四十二）、人見東明らは、「自由詩社」を組織して、パンフレットを出した。それに載った詩によって、幸次郎は「今まで眠り潜<sup>ひそ</sup>んでいた魂をよびさまされ、底の知れない憂うつへかりこまれる。」刺激をうける。そして、その年の末、「鍾」<sup>おもり</sup>など五編の口語によ

る自由詩をいつきに書きあげる。これが東明の推薦で発表された。幸次郎の詩人としての第一歩である。二十歳のときであった。

当時は自然主義文学の盛んな時代で、幸次郎も深くその影響を受けた。文壇にも実生活の上でも希望を失い、生きることに絶望して、虚無的な生活の日々が続く。そして遂に、二十二歳の年の暮れ、紅緑に置き手紙して幸次郎は放浪の旅に出た。

すべて徒歩の旅行で、関東地方から山梨県の甲府に行き、長野県に入って伊那から飯田を通り、木曾山脈を越え木曾路を西に下って名古屋にいたる。ここで築港ちつきうへ行って土方の仲間に入り、重いレールかつきやスコップを持つ重労働に従う。しかし、なれない仕事のため重い脚気かっけになって、骨と皮ばかりの体に、よれよれの浴衣ゆかたを着たみすばらしい姿で、ようやく東京の母と兄のもとに帰って来る。出奔しゅっほんしてから半年たった。

兄と母は、驚いて知り合いの医者に幸次郎を診てもらう。全快には一年余りの療養が必要だった。が、体調が快復するにつれて、幸次郎はそれまでの「暗黒と懷疑、自己喪失」の生活に、人道主義によって、光明を見出すようになる。やがて、人生を肯定する明るい詩を作りはじめる。明治から大正と改元された年のことである。

翌、一九一三年（大正二）——、はじめに述べた作品「自分は太陽の子である」が生まれた。この年を、幸次郎は「新生の年」といい、「自分は太陽の子である。如何いかなる奈落なちくの底へ落ちてあゝの燃え上がる空中の偉大崇厳な火の円球（太陽）を憧あこがれてやまない。」と言っている。

第二次世界大戦で、国民全体が奈落（地獄）の底にうごめくような生活をしたあとで、新制中学校の教科書に、「自分は太陽の子である」が載った意義は、深いものがある。

一九一四年（大正三）幸次郎は兄民蔵の援助で、それまで書いた詩をまとめ、「兄と母に 此の作品集を献ずる」と記して、詩集「太陽の子」を自費出版した。しかし、詩集の売れゆきは悪く、百部もさばけなかったという。

川路柳虹が、「塵溜はきだめ」というわが国最初の口語による自由詩を発表して、詩壇に注目されたのは、一九〇七年（明治四十）であった。その二年後、幸次郎がはじめて書いた詩が、口語自由詩だった。それからの五年間の詩作が、詩集「太陽の子」となったのである。この詩集を、識者は口語自由詩に新しい生命をもたらしたものの、口語自由詩が出発する最初の最も大胆な創造と評価したが、発刊当時は、一般にはあまり反響がなかった。

一九一九年（大正八）、幸次郎は、ある対人関係から自分のめめのめめの感情が、詩にあらわに表われることをおそれて、詩を作ることを放棄してしまふ。処女詩を書いてから十年、三十一歳にして詩の創作を自ら断たったのである。

翌年、それまで作った詩の中から作品が選ばれて、詩集「展望」が、新潮社から刊行された。が、これも売れゆきがよくなかった。

幸次郎が詩作を断念した一九一九年（大正八）、郷里弘前では、青森県最初の詩の結社「パストラル詩社」が、後藤健次、一戸玲太郎（謙



三二、桜庭芳露らによって結成された。幸次郎の影響によるものである。幸次郎は心をこめて、郷里の若い詩人たちを指導し助言を与えた。

この結社は、本県の文学活動の中で遅れていた詩の普及と進展に大きな力となりすぐれた足跡を残した。

この年、幸次郎は秋田県の人片岡梅枝と結婚する。

その後の幸次郎は、専ら評論と思索の発表に従う。が、一九二三年（大正十二）関東大震災に遭い、その年の暮、幸次郎は妻子をつれて雪の舞う津軽に帰ってくる。十七歳のとき、一人津軽を出てから二十年近い歳月が流れていた。

幸次郎は一九二五年（大正十四）、東奥義塾（塾長笹森順造）に招かれて、国語の講師となる。生徒たちがつくった雑誌に「わらはど」と命名したが、その生徒の中には、後年、直木賞作家となった今官一や、「津軽の旋律」（音楽）の木村繁などがいた。

津軽に帰った幸次郎は、「地方主義」運動のペンをとる。中央の勢力や統治に影響されない、地方を根拠としその地方の特色を発現する文化運動の提唱である。そして、一九二六年（大正十五）「地方主義の行動宣言書」を発表する。同人は、弘前地域の知識人・文化人で、その中には後に小説家として著名になる若い教師石坂洋次郎もいた。今日の地方の時代をさざかけること、半世紀である。

その頃、幸次郎は数編の散文詩を書いた。その中の一編をあげよう。

田舎唄の風景画

郷里生活をした初めの年の夏、裏日本の北部でこの季節には特有の青い高い空から、すがすがしい微風が吹きおろされ、地上は寛いだ、  
幸せな、ひそまりかえった空気を一杯に拡げるのであるが、わたしはこの頃のある日、北津軽郡内の小都会の板柳で、いつまでも心に沁み  
てわすれがたい田舎唄のいくさを聞いたことがある。それはボサマと呼ばれるこの地方特有のプロヴァンサル、すなわち漂泊歌唱隊  
(註)が、とある門口に立って、三味線のひなびた旋律のもとに、

ながく咲くのは胡桃の花よ

とそれこそ声を長々と引っぱって、号泣するように唄った一文句である。

わたしは山間の坂みちから、木の茂みや、屋根で重なりあつた谿底の村が眼に浮んだ。そこには胡桃の大木が、田舎びた満枝の花を見せ  
て咲きさかっていた。

ながく咲くのは胡桃の花よ

純朴な田舎人の見つけた感動すべき風景画である。

原註　ボサマは坊様ボッサマで、盲人の男女の唄うたうたい、津軽地方から北海道までもさまざまよって歩く。唄はジョンカラ節、ヨサレ節などの津軽民謡で、この胡桃の唄も、あるジョンカラ節の一句である。

一九二六年（大正十五）一月に東奥義塾を退職した幸次郎は、その年の十月、青森日报社（平川力経営）の主筆として迎えられた。そこで、整理係りの高木恭造と会うが、特筆されるべきことである。幸次郎に、借りものでない自分の持っている言葉——方言で詩を書くことをすすめられて、高木はそれに従う。その方言によって書かれた詩がまとめられて、詩集「まるめる」が誕生する。一九三一年（昭和六）のことである。幸次郎が、その序に、高木は日本最初の地方主義詩人として、この詩集と共に永く詩史上に記録されるとした。戦後、詩人高木恭造と、詩集「まるめる」の声価は、地方をはるかに超えていよいよ高い。

方言詩集「まるめる」の中から、幸次郎が「序」で取りあげた作品を紹介しよう。

吹フ  
雪ギ

高木恭造

ワラハド  
小供等エ

早ぐど寝でまれ

ほらア!

あれア白オウガメ狼ア吼ほえで

駆ハケで歩アりてらんだド

まいぎのい隈スマがら

死にんだチコ爺ババドにら媪にら 睨にらめでるド

ワラハド  
小供等エ

早ぐど寝でまれ

幸次郎の津軽滞在は、長くなかった。一九三七年（昭和十二）に、再び上京して評論、研究に従事する。幸次郎の詩論はすぐれたものだが、特に「日本音数律論」は、今日でも注目されるべき労作であるという。

幸次郎はまた、日本民族の伝統と文化の根源を窮めるため、日本各地の僻遠の山野にも出かけ、そのときに踏査・考察したのをまとめた「原日本考」を一九四二年（昭和十七）に、翌、一九四三年（昭和十八）には「原日本考続編」を刊行した。幸次郎の民俗学的な業績である。

一九四六年（昭和二十）冬、幸次郎は、戦後初の衆議院選挙に出馬した知人の応援のため、富山市に出かける。だが、寒中の無理がたたって病気になって帰京する。その後、兄の疎開先である千葉県館山市で療養につとめるが、兄民蔵、妻梅枝の看護も空しく、十月十一日、「兄さんありがとう」の一言を残して永眠した。五十八歳だった。東京都江東区深川三好町、双樹寺（現在は濟生院雙樹寺）に葬られた。

一九五五年（昭和三十）に、愛知県尾西市玉野善福寺境内に、「福士幸次郎先生原日本考発想之地」の第一記念碑が建てられた。二年後の一九五七年（昭和三十二）十月十一日、弘前公園三の丸に、「胸にひそむ火の叫びを雪降らさう」の詩碑が、弘前不串会の人たちによって建立された。今はその碑の前に、弘前市立博物館がある。昭和四十八年には、十和田市の北園小学校に、幸次郎の石碑が建った。それには次の詩句が刻まれた。

自分は太陽の子である

燃えることを懂れてやまない太陽の子である

**参考文献**

棟方寅雄『福士幸次郎』「郷土の先人を語る(3)」一九七〇年(昭和四十五) 弘前市立図書館  
小山内時雄『福士幸次郎著作集(上・下)』一九六七年(昭和四十二) 津軽書房

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年(平成十五年) 弘前市教育委員会、二七九～二九一頁